◎研究会活動報告◎

造形研究会　活動報告

初等教育科　田　中　美　貴

１．造形研究会の立ち上げ

本研究会は本年度に立ち上げ、活動を開始した研究会であり、初年度となった令和５年度は２年生５名、１年生13名の計18名で活動を行った。年度当初はじっくりと自分の作品と向き合う造形研究として、切り出しナイフを使った木のバターナイフ作りから始めた。

造形に関する教材研究など活動内容を探っていると、10月に開催されたベップアートマンスの企画登録をきっかけに、子ども対象の造形ワークショップの声が掛かるようになった。立ち上げ初年度ながら、１年間でワークショップを複数回開催し、精力的に活動を重ねてきた。以下に本年度の活動の概要を報告する。

２．初年度（本年度）の活動（ワークショップ）

（１）能楽堂こども広場

令和５年５月14日（日）、平和市民公園能楽堂（大分市）で行われた「マイファースト能楽堂こども広場－親子の思い出時間－」に２年生が参加した。他の研究会が能楽堂の舞台で歌や踊り、劇のパフォーマンスを行い、堂内の別室にて本学伊藤昭博教授による「親子で楽しいお面作り」が実施され、造形研究会はその制作サポートを行った。造形研究会としては初めての活動となったため、午前の部は緊張していた学生も、午後の部では最初の説明から援助や言葉かけを経験し、和やかな雰囲気で一緒に制作を楽しんだ。

（２）ベップアートマンス子ども造形ワークショップ@不老泉

令和５年10月28日（土）別府市共同温泉「不老泉」の中庭にて子ども造形ワークショップを同日に２回開催した。このイベントは別府・町じゅう文化祭「ベップアートマンス」のプログラムの一つとして実施し、子どもたちと大きな白いシートにハケやローラーなどを使って、絵の具の塗りたくり遊びを楽しんだ。

学生たちは子どもたちのダイナミックな表現に圧倒されながらも、子どもの笑顔に触れ、楽しく充実した学びの時間となった。不老泉に入浴に来られた方、通りすがりのご近所の方、観光客の方々にも観覧いただくことができ、地域へのアプローチも実現した。この活動を通して子どもたちにアートの楽しさや、別府の温泉文化の素晴らしさに気づくきっかけになればと思いを込め、作品に「わきでるおんせん♨わきでるあーと」の文字を浮かび上がらせた。作品はベップアートマンスの期間中、同年11月12日（日）まで不老泉中庭に展示された。

（３）別府市福祉まつり子ども造形ワークショップ@別府公園

別府市社会福祉協議会様よりご依頼いただき、令和５年11月12日（日）に別府公園で行われた別府市福祉まつりにて子ども造形ワーク

ショップを行った。テントブースにて、紙皿おめん、カラフル画用紙かばん、かざぐるまの３種の手作りおもちゃの材料を準備し、参加者の子どもたちとその保護者の方々と一緒に作って楽しんだ。１日で３回実施し、計106名の子どもたちの参加があった。予約制ではなかったため、乳児から小学校低学年まで、幅広い年齢層の援助を経験することができた。かざぐるまを持って嬉しそうに走る子、できたお面をかぶってお家の方に見せる子、子どもたちの弾ける笑顔がたくさん見られた。できた作品が人を呼び、最後の回には多めに準備した材料もなくなるほど大盛況のうちに終了した。

（４）Winterフェスティバル2023

令和５年11月29日（水）短大合同行事である「Winterフェスティバル2023」が開催され、造形研究会としては遊びのコーナーを制作した。10月からワークショップ続きだったこともあり、準備に十分な時間が取れなかったが、２年生を中心に役割分担をして短時間で廃材である空き箱を使った「的当て」や、「輪投げ」の遊具を完成させた。

（５）劇団立見席、クリスマスの造形ワークショップ

令和５年12月２日（土）、劇団立見席プロデュースの「おんせん♨演劇祭inビーコンプラザ」が開催され、「みんないっしょに～こども広場～」を複数の研究会で担当した。造形研究会は他研究会のステージ発表後の造形ワークショップを担当するため、研究会時間のみならず授業の空き時間を使って、画用紙でクリスマスブーツの形をしたバッグを協力して制作し、50個準備した。当日は別府市内の保育園の子どもたちや、お子様連れのご家族が合わせて50名ほど来場され、子どもたちがブーツのバッグにおりがみシールを切り貼りして思い思いの飾り付けを楽しみ、個性豊かなバッグが完成した。準備段階ではひたすら単純作業の繰り返しできつい部分もあったであろうが、できた作品を嬉しそうに見せてくれた子どもたちと共にクリスマスを待ちわび、達成感とともに日頃の研究成果を発揮することができた。

３．造形研究会の学生の声

２年Eクラス　土師 蒼葵

私が不老泉や福祉まつりなどの造形ワークショップを通して感じたことは、子どもの発想力・表現力は豊かで一人ひとり同じではないということです。題材や装飾方法も一人ひとり異なっており、模造紙を用いた表現方法ではローラーや筆だけでなく、子どもが手や足を使い体全体で表現する姿が印象的でした。そこからも、表現方法は無限大で終わりのない事だということを学ぶことが出来ました。

４．まとめと今後の展望

後期開始と同時にベップアートマンスの準備を始めてからは、イベント続きで駆け抜けるように活動してきた。２年生を中心に、１年生もできることを探しながら、各自で目的意識をもって前向きに、意欲的に取り組むことができた。実習の経験もままならない１年生にとっては、ワークショップの中で実際に子どもたちの反応を間近に感じることができ、多くの気づきが得られた実践の場になったと思われる。

今後も子どもたちとの触れ合いの中から造形活動の楽しさ、素晴らしさを伝えられるよう、積極的に造形ワークショップを開催し、地域の子どもたちがアートに触れる機会を創出すると共に、学生たちの学びにつながる活動としていきたい。